五里霧中の舳先

――一年の終わりの古典人形劇――

片桐啓恵

1　古典を学ぶ姿勢

私の一年生が終わった。過ぎてみればアッという間だが、半面、三年ぐらいは経った感じもする。生徒の姿が見えず、自分の姿も見えない。一体自分は何をしているのだろうという焦立ちにかられながら、壁にぶつかっては、そのたびに思いつきであれこれやってみた。泥の中を這いずりまわるような日々。そうして私の生徒たちが一年生を終え、私自身が一年生を終えた。

古典の学習を始めて十ヵ月めの一月、生徒に次のようなアンケートを行った。

1. (ア)古典の学習を通して、自分は何を学ぼうとしているか。
   (イ)今までの古典の学習で、自分は何を学び得たか。
2. 今までの古典の授業で印象に残っていること。
3. 古典の授業に望むこと。

対象生徒は私が古典を担当する一年普通科（1組～4組。ATの成績で分けられたHR固定の習熟度別編成学級。A＝4組、B＝3組、C＝1、2組の順になっている）生徒数一八三名中、回収したのは一二六名。回収も徹底せず、きわめて大雑把なものだが、その結果を表Ⅰ～Ⅳにあげてみる。

古典を通して何を学ぶのか。ほとんどの者が、「昔の人の生活、考え方」と答えた。それを自分自身の生き方と関連づけようとする者はまだ多くはない。が、半ばひねり出した回答であったとしても、ほとんどの生徒が自分の意志で書き得たことを評価しよう。そして私は、絶えず、「何のために学ぶのか」「何を学ぼうとするのか」という問いを彼らにつきつけたいと思う。学習者がそれを自分自身に問うことなしに、学習の成立はあり得ない。そうして、その問いに応え得るもの、彼らが答として拾うことのできるものを、私は授業に貯えねばならない。

ここで少し気になるのは、学力の高い4組で、学ぶ目的がわからないと答えた者が多いことである。毎日の早朝補習、定期、実力考査合わせて年間十八回。本校の進学指導は厳しい。「わからない」と答えた、その求めるものの次元がさまざまであるからそのことと短絡的に結びつける気はないが、特に受験用学習に一年のうちから追いたてられる上位クラスの生徒が、学習の本来の目的を見失ってしまうのはむしろ当然の成り行きのように思える。下位クラスは逆に、置き去りにされることで目的を失う。もっとも、最終的にはそれなりの進路におさまってしまうのだが。私は、少くとも私の授

表Ⅰ　1. (ア) 古典の学習を通して，自分は何を学ぼうとしているか。

	1組	2組	3組	4組	計
昔の人の生活，考え方。	19	15	20	19	73
昔と今の生活，考え方の違い，推移。	3	5	1	1	10
昔のことを学び，現代の自分の生き方に生かす。生きざま。	3		5	3	11
日本の言語，昔と今の言葉の違い，推移。	4	2	1	4	11
日本（文化）形成。	1	8	5		14
日本への外国文化の影響。		1			1
時代背景。			2		2
読解力，思考力，判断力，批判力をつける。	3	1	5		9
言語感覚を豊かにする。			1		1
人間の心を学び，自分の心を豊かにする。			3		3
日本人のほこり。				1	1
世間についての知識，現実への理解。	1				1
教訓。		1			1
古文（詩）にこめられた思い。		1			1
昔の人にとっての文学。		1			1
昔の日本文学。	1				1
古文のおもしろさ。	1				1
古文読解法。		1			1
文法，語句。	6	1		1	8
古文，漢字の知識。				1	1
古典の表現方法。	2	1			3
何もない，よくわからない。	1	1	1	6	9

表Ⅱ　1. (イ) 今までの古典の授業で，自分は何を学び得たか。

	1組	2組	3組	4組	計
昔の人の生活，考え方。	16	19	12	8	55
武士の生き方が印象的。			6		6
昔の人は自然を好んだ。			1		1
昔の人と詩のつながり。	1		1		2
昔の人の愛し方。				1	1
昔の人も現代人もあまり違いがない点。	2		2		4
昔と今の人々の生活，考え方の違い。	1		10	2	13
現代人は感動が少ない。		1	4		5

ことばを学ぶことの大切さ。		1		2	3
自己をみつめなおす。				1	1
ひとつの事柄に対する思想の多面性。				1	1
世の中の現実。	1				1
古典文学と歴史のかかわりあい。				1	1
古典の楽しさ，おもしろさ。	1	2			3
古典を理解できるようになった（要旨がつかめる。）	4	4		1	9
辞書をひくことがおもしろくなった。				1	1
口語訳が楽しくなった。	1				1
予習しておかなければならないということ。				1	1
古典は，自分がやる気にならないとわからない。			1		1
積極的に授業に参加すること。		1			1
文法をマスターしなければ理解できない。	1				1
古典の表現法。		1			1
歌の技巧。	4	1	2	4	11
文法的なこと。	7	7	5	5	24
漢文の読み方。	1				1
昔と今のことばの違い，推移。	1	2	4	2	9
故事成語。				1	1
ごく基礎的な事項さえ学びとれていない。				2	2

表Ⅲ　2.　古典の授業で，印象に残っていること。

	1組	2組	3組	4組	計
グループ学習		5		4	9
百人一首（班別の研究，発表，カルタとり）	6	3	25	8	42
徒然草（絵本）		2	12	6	20
古今集（歌物語）			6	5	11
野外授業			7		7
鼻蔵人	2			1	3
平家物語　　敦盛の最期	4	3	3	3	13
武士の生き方			1		1
徒然草　　兼好の性格，考え方	9		4		13
つれづれなるままに	2	1			3
高名の木のぼり	2				2
高野の証空上人	1				1
伊勢物語（初冠の男の反応の速さ）		1			1

土佐日記	1		2		3
古今集	2				2
昔の人は春を待ちこがれていた。	1				1
自然に対する鋭い感覚。			1		1
昔の人の恋愛，愛情。		2		1	3
貴族の知性，はでな生活。			1		1
昔は男の人が好んで詩，日記をかいていたこと。			1		1
歌の意味の深さ。		3			8
たくさんの句法がある。			1		1
花は桜のこと。			1		1
昔と今のことばの違い。			1		1
古典はおもしろいと感じた一瞬。				1	1
（古典の学習は） 絶対に受身であってはならない。		1			1
源氏物語の話。	1	2		7	10
先生の話（物語の背景など）。	1	5	1	2	9
先生の体験談。				4	4
銀河鉄道 999の話。			1		1
「ことば」の話。				4	4
自主的に発表しなかった。	1				1
手をあげないと沈黙がくる。	1				1
自分からすすんで手をあげた。		2			2
指名されて，答があっていた，ほめられた。	1	2		1	4
〃　　答えることができなかった。	1	1	1	1	4
予習で訳したのがほとんどまちがっていた。			1		1
1学期の中間考査がもどってきた時。			1		1
テストが悪かった。	1			2	3
説教されたこと。	1	11	1		13
先生が途中で教室を出ていかれたこと。		2	2		4
予習していないのがイヤ。	1			1	2
文法を理解していない自分のみじめさ。	1				1
文法の説明。	1				1
「ず」の活用の暗記。	1				1

表Ⅳ　3.　古典の授業に望むこと

	1組	2組	3組	4組	計
授業に対して					
今まで通りでいい。	15	11	10	2	38
グループ学習		2	2		4
（今まで通り）いろいろな試みをしてほしい。			1		1
活発な授業。		1			1
ハートのこもった授業。				1	1
待ちどおしい授業。		1			1
わかりやすい授業。	2			2	4
おもしろく教えてほしい。				1	1
ゆっくりした授業。				3	3
教科書外の豊富な話。	1	2		5	8
昔の人の生活，時代背景を詳しく話してほしい。	1	3			4
ノートする時間をとってほしい。			1		1
写真などはゆっくり見せてほしい。			1		1
意味（訳）をもっと詳しく言ってもらいたい。			6		6
ことばをゆっくり言ってほしい。				2	2
文法を詳しく。				3	3
重要事項はくり返し言ってほしい。			1		1
どんどん指名して（文法を覚えさせる）。		1	1	1	3
時間どおり終ってほしい。		1			1
板書の字を大きく。	1	1	3		4
課題を出してほしい。	1				1
10分間文法テスト。		1	2		3
試験前のまとめのプリント。	2				2
自分たちについて					
文法を徹底して覚える。	2	2	3		7
歌の深い意味まで知りたい。		1			1
予習，復習を十分にやる。	4		4		8
一生懸命，まじめに授業にとりくむ。	2		3		5
自主性を持つ。			2		2
漢文をがんばる。				1	1
訳を完全にできるようにする。	1				1
誰もが楽しく発表できるムードにしたい。	1				1
昔の文を多く読みたい。	1				1

業において、そんな学習はまっぴらである。私の焦立ちの一番の根はこの渦に呑み込まれてたまるかという思いにある。だからこそ、動くことで、精一杯自分なりの試みをやることで血を流そうとする。血を流さなければ、渦の中で自分の位置を保つ自信は私にもないのだ。

試みは、薄気味悪いほど消極的な生徒をいかに動かすかということであった。すべてが受身で、鍛えられれば黙って従う。彼らに一番必要なのは、自分で考え、工夫し、研究し、創造する力をつけてやること。そこで、生徒を動かす試みとして、一年間に次のようなグループ学習を行った。

百人一首　グループ研究・発表
　単元　1.古典入門
　五月　1～4組
徒然草　絵本製作
　単元　2.人間探究
　七～八月　2～4組
古今和歌集　歌物語
　単元　4.自然と人間
　十月　3・4組
古典人形劇（伊勢物語・古事記）
　単元　5.愛の世界
　　6.神話の世界
　二～三月　1～4組

一月に行ったアンケートの目的の一つは、これらのグループ学習（古今集まで）に生徒がどういう反応を示しているかを知ることであった。そして、そろそろ一年が終わろうとしている時、残りの時間をどう使うかを考え直そうと思ったのだった。

表Ⅲによると、かなりの生徒がグループ学習が印象に残っていると答えた。

。古典の授業の中で、研究発表したことで、他の授業にはない楽しさというものがあったと思います。そのことで、授業は先生の説明を聞くだけでなく、自分たちで〝調べていく〟ってことを学んだと思います。（2組　女子）
。グループ学習は、けっして楽しいものではなかったけれど、完成した時の喜びは忘れられない。（4組　女子）
。古今和歌集をそれぞれのグループ別に勉強して歌物語をつくったこと。まるで伊勢物語の作者になったような気がした。（結果はおそまつだったが…）（4組　女子）

初めは、自主性・積極性をつけるため。その前に積極的になれるよう発言の材料を持たせる。材料を持つための、調べ方を身につける――それがグループ研究・発表の目的だった。やがて、何かを〝つくる〟作業を通して古典の楽しさを知るという方向に変わってきた。それは、私自身の古典を楽しむ方法のさまざまな模索でもあった。アンケートの回答の中で、直接グループ学習に関してではないが、表Ⅱに「古典の楽しさ、おもしろさ」「辞書をひくことがおもしろくなった」「口語訳が楽しくなった」「古典を理解できるよ

うになった」というのがある。少数だが、こうした小さな喜びを大切に育てていきたい。教師の目からは見過しがちな些細なことに彼らがどれほど喜び、悲しむか、回答一枚々々をめくりながらハッとさせられるもの、考えさせられるものがいくつもあった。

。伊勢物語の富士山の歌のところですばらしい発表をし、先生に95点と言われたこと。あれを言われたときは、あまりの感動で体はうちふるえ、鉛筆をとる手は上下左右に揺れ動いた。あの感激をもう一度。（4組　男子）

。先生が、「これは大事な語句ですよ」と言われて、次の時に「この語句の意味は」と問われて、自分がそれがわかっていた時のうれしさ。また、わからなくて、人がそれを言った時、「なるほど」と思い、それが自分のものになっていくたのもしさ。（4組　男子）

。前は古典というだけで〝あちゃー！〟という感じだったが、だんだん好きになってきて、近ごろは「今昔物語」（物語ふうに訳してある）を読んだりするようになった。で、結局、古典の楽しさと文法の大事さ、覚えなければ、ということを学びました。（2組　女子）

。3組は自主性が欠けていると思う。（私もはいるけど）発表しようと思っても、なんとなくしにくい雰囲気なのです。これは3組の全員が悪いのだと思う。自分たちで授業をイヤなものにしているのだと思う。このままだったら、だれか勇気のある者が出てこないかぎり、ずっと今の状態が続くと思う。（私がなれればいいんだけど……。）こうなったら先生にどうにかしてもらいたいと思います。ゴメンナサイ、メイワクカケテ。（3組　女子）

。何かずるずると来たようでパッとしたものがない。だんだんと人から離されているようでせつない気がする。（3組　男子）

。古文を読んでわかるようになったことがやっぱり一番だ。それによって、文の意味もわかるようになってきた。前に読んだ時はこう思ったのに、今読んでみると、ああ、こうだったのかと思うようなものがたくさんあって、とてもうれしい。（3組　女子）

。今は、(7)で述べた事を（たぶん）学んでいる途中だから、（何を学び得たかは）まだ、わからないんです。それ自身が漠然としたものであるから、つかまえることができないんです。だから卒業する頃には、もっといい答ができると思いますが……。（あっ）一つだけ、今、はっきり言えるものは〝言葉の大切さ〟かな？（4組　女子）

2　古典人形劇をやろう

さて、残りの時間の計画をどうしよう。表Ⅳを見て、1組に「今まで通りの授業でいい」が多いと気づいた時、ドキンとした。学習意欲が低いために実際には一番心を砕いて授業方法を工夫する必要のある一組に対して、私は何の方法も講じてやれなかった。A・B・C各クラス間の学力差は、テストの平均点で10点ぐらいひらく。

平均点ではあまりかわらない1組と2組だが、雰囲気として2組の方がまじめである。ただ、クラス全体にまるで活気がない。1組は積極性を持つ者（少くとも積極的になろうと努力する者）とそうでない者の差が大きい。2組にはクラス全体に対して手を打つことができた。説教の印象が2組で特に多いのはそのためであろう。根競べの末、二学期の終わり頃には、十人ほどが挙手の常連になった。けれども1組に対しては、（本当に嫌な言葉だが）私はお客さん扱いにしてしまったのではないか。すまなかった。楽しい授業もしてやれなかった。やりたくても、進度の遅れる1組では、グループ学習の時間がとれなかった。

既に4組では、少々の余裕を持って年間計画を終えようとしていた。もう一回はグループ学習の時間をとれる。最後の古事記「八俣の大蛇」で人形劇をやってみようか、そう思っていた。他のクラスはそれどころではなかった。が、この時私は決心した。教科書を終えることができなくてもいい。一年のまとめとして、全クラスで人形劇をやろう。

進度はもう、各クラスまちまちだった。教材は次のようになった。

1組　伊勢物語「筒井筒」
2組　伊勢物語「筒井筒」
3組　伊勢物語「都鳥」
4組　古事記「八俣の大蛇」

人形劇をやろう。威勢よく決心はしたものの、どうなるのか見当もつかなかった。ただわかることは、こりゃあ大変だということ。これまでのグループ学習は、グループ毎に何かつくりあげておしまいだったが、今回はその上にグループ間の連絡をとり合ってクラス全体でまとめあげなければならない。

本文通読・役割決定…1時間
脚本・人形・背景づくり…2時間
総合練習…1時間
上演・反省・まとめ…1時間
計　5時間

時間配分をこう決めたが、本当に上演までこぎつけるだろうかと不安だった。しかし、一旦やり始めたら、やりあげなければ意味がない。生徒には、今までのグループ学習とは違うんだ、心してかかれと檄を飛ばしてとりかかる。

その頃、校内の新任研修会で、十月に次いで二度めの研究授業をすることになった。教科主任に「今、古典で人形劇をやってるんです。」と言うと、「はあ、そうですねえ。今度は何かふつうの授業でも…。」と言われた。十月は古今集歌物語をやったのだった。そうかな。今度はふつうの授業、漢文か家政科の現国をやった方がいいかな。けれども、研究授業は自分の最大のテーマを持ってやるべきではないか。漢文でも現国でも自分のテーマは変わらないが、今の自分が賭けているのはやはりこの人形劇なのだ。研究授業もこれでいこう。あれこれやってみるよりも、研究授業を通して、私が試みようとしているものを一つ、はっきりと打ち出していこう。

3　明暗

あの古典の教師がまた妙なことを言い出した――「今度はね、人形劇にしてみようと思ってるんだけどね。」と言ったとたん湧き起ったワァ！。騒ぐ生徒たちには、もちろん、どんなものができあがるのか想像もついていない。言い出した私も、頭の中に完成図ができあがっているわけではない。現実に物をつくらねばならぬとなれば、この生徒たち、何とかするだろう。動かざるを得ない状況に追い込んでおいて、後は彼らの未知の力に多分に期待している。できあがっていく過程で、作品のイメージからはずれぬよう、内容理解が深まるよう指導する。青写真はその程度のものであった。

研究授業は日程の都合で3組に決めた。上演は3・4組が二月末、1・2組が学年末考査をはさんで三月下旬、と分かれた。結果から先に言ってしまおう。早く終わった3組と4組で、私は見事に明暗を経験した。3組においては、いくつかの失敗にもかかわらず、生徒にも私にもある満足感があったという意味での明。4組では、指導の手抜きから作業全体が遊びに堕し、知的活動の実りがなかったという暗。

これから3組を中心に作業過程をたどり、生徒が書いたグループノートによって結果の一端をまとめてみたい。

グループは、脚本部・語り部・人形つくり部・人形操り部・背景つくり部の五班に分けた。一学期からの五班を基本に分けたのだが、3組だけは毎回班を変えたので、今度も登場人物数に応じてグループをつくった。また、他のクラスでは演出を語り部の中に含めたが、3組では独立させて二人を当てた。結果的にはこの二人が進行・まとめ役をつとめ、他のクラスより運営がスムーズだった。しかもこの二人、普段はクラス内でリーダー役についている生徒ではなかったのに、実に意欲的に取り組んでいた。それはとてもうれしいことだった。

役割はすべて希望で決定した。役割決定の時に、本文通読して、大意・登場人物・場面を読みとる。

その後、グループ活動に入る。脚本用・人形つくり用・背景つくり用と下書きやデザイン考案のための作業用プリントを用意する。特に人形つくり、背景つくりでは、デザインを決める前に登場者の性格・役割・背景の雰囲気などをよく読みとり、話し合って記入するよう指示する。

今度の作業で最も厄介な点は、グループによって作業の段階が異なることである。脚本ができなければ、語り部は仕事がない。人形ができなければ、人形操りは仕事がない。だから自分で仕事を見つけて動くようにさせねばならない。脚本や人形ができていなくても自分たちのイメージを話し合うことはでき、それを脚本部や人形つくり部と意見交換することはできる。語り部や人形操り部は実際に演じる側だから、脚本や人形に対する要望を伝えておく必要がある。暇な時は進んで他班を手伝う。

人形は厚紙で作る。背景は模造紙に書き、その他必要な材料は各々工夫する。人形の手足も動くように。

グループ作業の段階は図書室、総合練習からは教室で行った。

――3組のグループノートから――

2月9日　脚本班

〔活動状況〕図書室の資料を使い、段落分け、原文の口語訳及

び語り部の要望によるセリフの付け加え。
段落分け―完成
原文の口語訳ほぼ完成
セリフの付け加え―未完成
〔反省〕古語・現代語をどのように使い分けるかに時間がかかった。結局、歌のところを古語に、他は現代語にし、又語り部が古語で歌を読んだあと、口上役が現代語でおおまかな訳を読むことになった。
準備が不十分で大変とまどった。脚本を早く配付しないといけないので、今後は準備も十分に、能率良くやっていこう。
※傍線部―教師より
〈歌物語〉の味わいが生かせるかな
2月16日（第1時限）人形つくり班
〔活動状況〕人形の下書きをした。どういう風な絵にするか、資料をあつめた。厚紙・えのぐ・クレヨン・色えんぴつ・はさみなどを用意した。
〔反省〕人形をどういう形にするか、男女の意見が合わず、こまってしまった。厚紙など材料不足だった。
本文の中に人物の姿や特徴が書き表してないので、そこのところを自分たちで考えるのに苦労した。
本文をよく読んで解釈をあまりしていなかったのでこまってしまった。
わりと男女、協力して、よく意見もかわしあい、仕事も分担してやったと思う。

絵がへたな私たち（女子）としては、男子にたよるだけ…ホントにすまないと思います。でも、色ぬりはまかしといてほしい。がんばります。
2月16日（第2時限）人形操り班
〔活動状況〕他の班に行って打ち合わせをした。登場人物の性格などを研究。（男子の活動）
人形づくりの班に行っての手伝い。妻と鳥の下書き、色ぬりなど。（女子の活動）
〔反省〕伊勢物語は歌物語なので、内容を深く読みとることがむずかしいと思いました。その時の状況を自分なりに考えて解釈していると、ついこまかいところを見過ごしがちです。その一つの場面にしても、今日やった、馬に乗っている、乗っていないで、またすこし感覚がちがってきます。今の私達の生活や感じ方は昔のものとはくいちがったりするときがあるので、古文を読むときはその時代の生活様式・慣習などに気をつけて、その上で一つ一つ書いてあることをていねいに解釈していくことが大切だと思います。
2月21日　脚本班
〔活動状況〕教室で脚本を見て、ミスがないかを調べた。
脚本づくりがおわったので、演出をいろいろ考えた。
〔反省〕休み時間を利用して、必死で脚本をつくり、どうにかこうにかやっとつくりあげた。
できた脚本を見たときはさすがにうれしかったが、中にあった数々のまちがいにはおどろかされた。やっぱりあせって書いた

のがよくなかったのだろう。
これからは演出家の人たちといっしょに、演出をがんばってやりたい。
2月21日　語り部
〔活動状況〕台本の読み合わせと練習。
〔反省〕みんなまじめによく練習していた。感情をこめたり、どんなふうないい方をすればいいかなどよく考えてやっていた。みんな協力してやっていてよかったと思う。
2月25日（補習・第6時限）背景つくり班
〔活動状況〕補習時…絵の順番・ならべ方。二回全部通して練習。
6校時…本番・発表。
〔反省〕発表の時、絵を二人でうしろから持ってしたが、場面の切りかえがスムーズにできなかった。場面の切りかえのとき、一枚だけ早めに切り放しすぎたものがあった。絵がちょっと雑だった。しかしみんな一生けん命がんばって本番に間に合ったし、一応成功だったのでよかったと思う。
2月25日　人形つくり班
〔活動状況〕補習時…リハーサル
6時間目…本番
〔反省〕リハーサルはなにもすることがなかった。
人形作り部が先生にほめられてうれしかった。
主人公の男は、顔の向きなどをもっとよく考えて作った方がよかったと思う。他の人形もなんか動かしにくそう(?)だった。

PS　本番の時、一番おもしろかったところでも先生方に笑ってもらえなかったことにはがっかりした。
2月25日　演出
〔活動状況〕・本番の打ち合せ・本番
〔反省〕もっと補習の時てきぱきとやって、少くともう一回練習をやるべきだった。昼休みにもう一度打ち合せをやっておくともっとよかったと思った。しかし、おもしろく、初めての時に比べるととてもよかった。

こうして、生徒にとっては上演本番、私にとっては研究授業本番の日が来た。いつもギリギリにしか仕事をしない私だが、この時も指導案を刷ったのは当日の朝だった。けれどもその数日前から夕方七時まで残って悩んでいたのだった。人形劇は何とかできそうだ。だが、これをどう一斉授業に結びつけてまとめればいいか。本番25日は月曜だった。前日の日曜日、朝十時から夕方五時まで学校に出て、誰もいない職員室で教科書・指導案用紙とにらめっこ。警備係の人に五時に追い出されて家に帰り、できあがったのは夜の何時だったか、あまり眠らなかったことだけは覚えている。

グループ学習の後は、いつもグループノート班記録用と個人の感想を提出させる。個人用は西洋紙¼が担当した仕事、¾が感想を記入する欄になっている。その洋紙¾にびっしり書いてくることが条件である。

書いてきた四十七名の感想。その全部を紹介したいほどよく書いている。どうしても挙げておきたいものだけでもかなりある。長く

なるが、これらの生徒の文章が、彼らの意気込み、授業の雰囲気、私の気持ちまでも語ってくれると思うから。

グループノート・個人の感想

。まず第一に舞台の配置だが、できれば机（長机）一つより机を二つおいて、場所を二つに分けた方がよかったと思う。それに合わせて背景も二つに分けると背景係は模造紙を続けて持っているきつさもなかったし、前もって次の準備もできたであろう。また、人形操りにとってもあれだけのスペースでは狭すぎたのではなかろうか。

次に、これは練習不足ではあるがどこの場面でもナレーターが先行し、それにあわせて人形が出るという状態が続いた。これはおかしい。本来ならば人形が出てナレーターがそれについて説明するという形でなくてはならないと思う。しかし、先程も述べたよう、練習不足だからしょうがない。

いま思うと、僕は演出として指導力や決断力に欠けていたようだった。もっと早くいろいろ打ち合せをしていると、もっとよい結果が出たと思う。

いまさらいろいろいってもしょうがないが、一年間の古典のうちで一番おもしろく、一番やりがいのあった仕事であった。

（男子・演出）

。まず全体的にまとまってどの班も一生懸命やっていたことがなによりもよかったと思う。実は、朝の補習時間を使っての練習の時には少し心配にもなっていたが、今はとてもうれしい。

個人としては、あまりみんなの役に立てたとは思わない。自分の仕事である語りは、きたない声で感情をこめるのがまずかったと思うし、本番にはあがってしまって、自分でできながら声を出すことができなかった。こんな時はいつも早くなるので劇を不自然にしたかもしれない。あと二・三回練習をして本番といきたかったけれども…。

劇は練習が少なかったにしてはうまくいったと思う。1の3全員で今までに行ったことの中で、今日のことがいちばん協力しあえて心が一つになったのではないだろうか。これをきっかけとして、あとわずかしかないけれど、学級がもっとまとまればよいなあ。

「都鳥」を最初によんだ時のあのなにがなんだかわからないいらだちに対して、今、みんなのおかげで内容が具体的につかめた喜びがある。ただ、自分の力で訳を試みなかったことの罪意識が少しあるが…。

人間の感情をよみとることのむずかしさを感じる。とくにこの伊勢物語では、あの短い歌の中に、私の想像のおよばぬ深い思いがこめられていたのには驚きさえ感じる。伊勢物語が愛の物語と最初の時間学んでいたが、いったいどこに愛があるのか…とこの劇を始めたころは思っていた。そのころの私はどこにも愛など感じとれなかった。その意味でこの「都鳥」は自分の力のなさを思い知らされた話でもあった。同じ人間であるけれど、古典の中の人間がもっと感じやすく、いろんなもちろん私の知らない感情もさまざまな技巧やことばで表わしているのだなあ。それを、この「都鳥」でえたように鮮明に具体性をもっ

て話の中にはいりこむのは、自分一人ではまずむりだなあ。いつも自分が古典をよんでえがくイメージや想像は、授業での解説と全く別なものになるのだ。それだけ自分の見解が狭いからだろう。古典の学習を通して、この狭い私の見解が広く大きくなっていけばいいなあ。（女子・語り部）

。人形が出来ていなかったりで実際の人形を使っての練習があまりされなかったのに人形をあやつる人も声の人も上手だったと思う。人形がもう少しどうにか工夫されればもっといろんな感じが出せただろうにと思う。

初め人形劇をやるようになったときどうなるのかと思っていたけど、やってみるとすごく楽しかった。やってみて良かった！と思う。それで今日（2／25）の授業は、クラスの雰囲気に対しても先生に対しても「わあっ」という心のうごきを感じた。人形劇をやるときのみんな一人一人の緊張感というものがよくわかり、こんな一生懸命になる時があるっていいなあ…と思ったし、最後のまとめを先生がして下さった時には、ああそんな考え方をするんだなあとほんとうに驚いた。それでこの都鳥の内容も前より、私が思っていたよりもだいぶよくわかった。それと同時に自分の理解力のなさと考えの浅はかさにも充分気がついた。だから都鳥の内容の良さは今日はっきりとわかることができた。あんないい内容だとは思っていなかった。まだまだ私の考えは小さすぎるし想像することすらできない。だから自分の考えをどんどん表現していろんな想像ができる先生をとてもうらやましく〝先生はやっぱり素晴らしかあ――〟と思いました。ほんとうに私の理解していた内容は薄っぺらなものでした。恥ずかしいほどに…。人形劇も良かったし、先生のまとめをして下さったのもほんとうにほんとうに良かったと思う。はっきり言ってやっと古典のすばらしさがわかり好きになりました。前までも古典きらいではなかったのだけど、今ではほんとうに好きになりました。変な感想ですが今日の授業で私が一番思ったことです。（女子・人形つくり部）

。全体的にみて一応成功だったと思う。でも、個人的に見てみると反省点はたくさんある。

まず、背景の場面が変わるとき、初めは紙を竹の棒にまいて巻物式に、スムーズに変わるようにしたかったのだが、時間がなかったので竹を用意できなかった。だから発表時は二人で手に持ってしたが、やはりかさばってうまくいかなかった。

それから、しめ切りの前日にやっと書きあげたのだが、それまでなまけていたためか、絵がとても乱雑になってしまった。だから見ている側にとっては見ぐるしい面が多かったと思う。この点が僕個人としてはとても残念に思っている。

でもクラス全体みんなで力を合わせてやってきて、やはり一人一人何か得るものがあったと思う。クラブを休んでまで協力した人もたくさんいたし、そういう面で今回の人形劇を通してクラスの和というものがまた一つ大きくなったような気がする。

また、こういう違った表現で古典に接してみて、あらためて古典の味わい方、おもしろさがわかり、とてもためになった

し、なにより僕の古典に対する見方及び価値感がそうとう変った。今まで古典といえば文法事項を覚えて、ただ読んで訳すだけ、それで終りというような感じだったけれど、作者の意図にしても、登場人物の言葉一つにしても、その中にさまざまな想がこめられ、感情が入り、まじっているということがわかった。

とにかく、今回の人形劇は僕に色々なものをあたえてくれたと思うし、またこんな昔の人々の考えが、かえってこれからの僕の人生にどんな影響をあたえるのだろうかと考えると楽しみなぐらいである。（男子・背景つくり部）

。人形劇をやって、古典というものは、ただ本文を読むだけじゃ理解できないなあ、と強くおもいました。五・七・五・七・七のたった三十一文字の中に、自分のあらゆる気持ちを折り込んでいるのだから、ちょっと歌に目を通しただけじゃ、とうてい歌の味なんて味わえませんよね。

私はあやつりで、妻の役をしたのですが、私がもし妻だったら、愛する夫が自分をのこして旅にでるのはどんなにつらいことか。夫のほうも、ずいぶん妻への気持ちがつのっているのだし、いっそのこと旅など出なくてもいいのに、とさえおもえてきます。

私はこの「都鳥」で、別れの悲しみというものを考えるのです。人間、一生のうち、別れというのは一度はあるものです。やっぱり、愛があるものとの別れはとてもつらいのでしょうね。

古典の再表現をして、古典ってすごいなあ、とおもいました。むかしの人は、自分の感じるままを歌にしていた。愛や悲しみ、風景、季節感、あのきれいな着物を身にまとい、まっ黒の長い髪をした。そして、りりしく冠をかぶった人たちが。と、と、と、わたしは、なんともいえない黒と紫の色彩を感じるのです。

私は、以前よく、過去に行けるタイムマシンがあればなあ、とおもっていました。というのは、近代化した現代の文明、例えば、ガスコンロや電子レンジ、冷暖房器やテレビなどの重宝品を「どうだい、すごいだろオー」自慢して、びっくりさせてやりたかったのです。そして、悪人たちの密会をカメラに写し、計画をテープにとって次々と悪人どもをやっつけたら、すごく気持ちがいいだろうなあと思ったのです。でも、いまは、もし過去に行けたら、古典の世界にどっぷりつかりたいです。

生活が合理化されていく今の時代。便利なことは便利だけど、私の場合、考え方、感じ方までもが合理化しているように思います。こんないい方は少しおかしいかもしれませんが。昔の人たちは、一首の歌をよんで、自分の感じるままの解釈をし、歌の中の気持ちや情景を読みとったのですね。をかしやあはれを感じて。とうてい私には、そのような感受性はそなわっていません。もっと古典を勉強しなければ。

私が考えていたより、ずっとりっぱな人形劇でした。みんな、一人一人、よく協力してやったとおもいます。この人形劇は、「都鳥」といっしょに、ずっと忘れません。よい思い出になります。先生、ありがとうございました。（女子・人形操り部）

クラス全員と言っていいほど、彼らが私のまとめの授業を驚きやハッとする心の動きで受けとめてくれたのは、それまでにいい人形劇をつくろうと必死に取り組んできた過程があったからである。下校時間延長願を出してまでの放課後の活動。土曜日の総合練習から当日朝の英語の補習をもらってのリハーサルそして本番、と一気に盛り上げていった緊張感。朝の補習の時までは、やれやれ、どうなるのかなと思っていたのに、本番では見違えるような動きになっていた。私はリハーサルの初めだけ見て、隣のクラスの補習に行ったため、仕上げは生徒だけでやったのだ。その朝から昼までの時間に、四十七人の心が一つになっていくどんな精神の高まりがあっただろう。かつて、無気力な生徒、と私をくさらせ、アンケートに「3組は自主性がない」と生徒自らが書いた集団、本気で動き出せば予想外の可能性を揺り起こす。

3組の研究授業から三日後、4組の上演の日が来た。彼らもまた、放課後遅くまで残ってやっていた。授業の前、生徒が来て、「ほかの先生も呼んできていいですか」と言う。せいぜい担任や自分たちが習っている先生たちを呼ぶのだろうと許可した。人形劇をやるといった最初から暇な先生に見てもらおうと提案している。ただ、それを自分たちから呼んでまわるのが4組の生徒らしいのだが。

二階の教室に上がってみると、教室の後ろには校長、教頭はじめ国語科の先生や一年の先生たちがずらり。これでは研究授業と同じだ。冷汗がスッと流れていく。3組ほど緻密な授業計画を立てていなかったからだ。

人形劇が始まる。と言っても、準備に手間どってなかなか始まらない。舞台の作り方も、劇の後まとめの授業に入ることを十分頭に入れていない。この生徒たちの手際のまずさは、全く私の指導の手抜きのせいであった。肝心の劇は、先生たちのものまねをふんだんに入れて、まるで予餞会の出し物になっている。生徒の芸達者に笑いころげながらも、こりゃあ、だめだ、と思う。これは古典の学習じゃない。これをどうまとめに結びつければいいか。彼らの劇が古典の世界を求めようとして作ったものでないかぎり、それをより深い読み取りへと結んでいく絆は失われているのである。作品のイメージをくずすな。遊びでやってるんじゃない。どこまで古典を読み取り、イメージ化できるようになったか、一年間の集大成としてこの仕事をやるんだ――と何度も言い、3組はそれに忠実に取り組もうとした。一度作った人形の顔（クラスメイトの似顔）を作りかえ、遊びを軽くおさえて（遊ぶなと口で厳しく言いながら、イメージをこわさない程度の遊びは十分容認していた）、作品のイメージ作りに懸命になった。が、4組は、古事記のイメージなどほとんどかけらもない遊び事に堕してしまった。

劇の後、一応のまとめはしたものの、彼らが学習としての作業をはきちがえたことを、どうしても徹底的に追求しておきたかった。で、次のようなプリントを担任に託し、午後のHRで配ってもらった。このプリントに対し、彼らの感想には、反省と反発が入り混ってあらわれた。

4組のみんなへ（人形劇を終えて）

今、教室から帰ってきて、ついさっきの一時間をふり返っている。

自分たちで先生たちを招待して、楽しんで演じていた君たちの姿は確かに生き生きしていた。しかし…、と私はふと思ったのだ。君たちは、あの劇の一体何を見せようとしていたのだろうか。自分たちが精一杯作ったものを見てほしかった、それはわかる。しかし、小学生の学芸会ではない。まして予餞会でもない。高校一年の最終段階、一年間の総決算として、見てもらうべきものがあの劇に本当にあっただろうか。

四時間費して、ただ遊んだだけではなかったか。遊べる余裕は必要だ。文章を楽しむことはとても大事だ。だが、楽しみ方がまるで違っている。スラップスティック（ドタバタ芝居）をみたいのなら高校の古典の時間にやる必要はない。ここは学校だ。自分を向上させるための場だ。何か、君たちは根本的な思考の欠陥を持ってはいないか。

文学における遊びとは〈知的余裕〉のことだ。感動さえも生む遊びだってある。それは、作る側、受け取る側に知性の基盤があってはじめて成立する。古典では、そうした遊びがふんだんに出てくる。読者の我々も、たちうちできるだけの知性が要求される。

知性とは〝もの知り〟のことではない。社会の実相、人生の機微、人の心のひだを見抜き、感得する力のことだ。そのための知識だ。

君たちの場合、余裕の遊びではなく、作品をなめてかかったのだ―と私は思う。それは無知と傲慢の産物だ。その証拠に、君たちは、このような神話がつくられた理由、神話を語りついできた太古の人々のことをどれだけ考えただろうか。「日本」という国ができたことについて、現代まで解決されずに尾をひく深い問題をはらんでいるというのに。

君たちの演技力、創造力、行動力のすばらしさをすべて帳消しにするほどの根本的な学習姿勢の誤り、それを指導できなかったのは私の力不足のせいだ。このつらさは一生、心に刻んで忘れまい。

徹底した失敗もまた、次への踏み台だ。

君たちが二度と同じ過ちをくり返さぬよう、真に自己の知的レベルアップを期するよう、私自身の失敗の苦さをかみしめて、この一文を贈る。

S・55・2・28・木

4組の感想の一枚一枚をめくりながら、私はつらかった。「知的余裕とは何のことか、わかりません」「楽しくやれたのだから、いいじゃないか」という生徒。確かに、この一年、私は古典を楽しむことを教えてきた。しかしそれは、古典を自分たちの俗な駄洒落にまで引き落として笑うことではなかった。おそらく、同じように「楽しかった」「全員協力して懸命にやった」と言った3組と4組では、その質が大きく違っていたことだろう。わかってもらえないのかな。これが、手抜き指導の手痛いしっぺ返しであった。

諸刃の剣だ。手を抜いた分だけの成果。手をかけたら、手をかけ

た分だけの成果。アイデアだけでは結果につながらない。全くわかりきったことなのだが——。二つのクラスの反応、新米教師の無邪気な喜びとやりきれなさとを、ありのままに、ここに綴っておきたかった。

4　霧の向こう

考えてみると、このような大仕事をクラス全体の力でまとめあげるには、時期のリズムという大切な問題があるのだ。3組の生徒がそのリズムをつかんで緊張感を生み出したのは、研究授業のため日程変更で、練習から本番まで短い間に重なっていたからでもある。（研究授業のことは、生徒には直前まで知らせなかった）逆に、1・2組はそれぞれがんばったけれども、中に学年末考査をはさんだため、どうしても間のびして緊張感を持続できなかった。4組の感想の中に、試験が近く、本当ならば試験勉強をしなくてはならなかったのに、という部分があった。三学期の忙しい行事の合間をぬっての仕事である。授業の準備より試験勉強の方が大事という意識が心の底にある。それが何ともいじましく悲しく思える。

グループ学習は生徒に時間外の負担をかける。学校というところは、一年中忙しい。特に本校のように試験の回数が多ければ、生徒に作業をやらせることにためらいがある。しかし、本校の生徒の本質の最大の問題点は、まさにここにあるのだと思う。

年間二十回近い試験をやり、その度に席次表を刷って（下位二十名程度だけ無記名）生徒に渡す、そんな学校で、生徒の負担に目をつぶり、何とかやってみてくれとグループ学習をくり返す私は、明らかに流れに逆らっている。「川高むけの授業も考えてください」と言われる。

3組の研究授業の前日、こんな夢を見た。研究授業大失敗の夢。教室に入ると、授業を見にくるはずの先生たちが誰も来ていない。アレ、おかしいナ、先生たち教室まちがったのかナ…と思いつつ授業を始める。さて、人形劇を始めると、いくらもたたないうちに、生徒がけんかを始めた。原因はわからない。それで教室はてんやわんや。一人がやめた—と飛び出し、続いて残りの生徒も教室を飛び出していった。そのころには、先生たちがパラパラいた。その方を横目でみながら、あー、生徒をとめなくちゃと思いつつ、一方で、いいや、これはこれで、こういう結果になったのだから仕方ないと、次々に出ていく生徒たちを見ている。よく考えてみると、けんかを始めて最初に飛び出していったのは、おかしなことに隣の4組の生徒だった。……そこで、冷汗かいて目がさめた。

研究授業の前後、度々野地先生に電話し、不安な点を聞いていただいて、御指導いただいた。この夢の話をした時の先生の話。

そういう夢をみるというのは、ギリギリのところで授業をしているから。でも、考えてみると、その夢以上の悪い結果はあり得ない。

また、教室を飛び出していった生徒たちは、野原に出て行っても、そこには自分たちの心（知的欲求）を満たしてくれるものがないと知った時、教室にもどってくるだろう。

先生の言葉の終わりの部分が、以来私の頭から離れなくなった。心を満たすために、生徒たちが教室にもどってくる。自分たちの心

を満たしてくれるのは、あの先生の授業がある教室しかないと。本当に、そんな授業をつくりたい。

水路定まらず、日の前には濃い霧が漂っているだけの暗い海で、小さな木舟の舳先に立ち、私は何とか霧の向こうを見たいと目を細めている。試みは霧をかき分けるのに役立ったか。

現在、二年生の五月半ば、私も、そっくり持ち上がった生徒たちも。

また、一番最初の、〝水を飲まない馬〟のところでつまずいている。やはり、二年になれば、試験の回数もふえることだし、受験の準備をさせなければならないだろう。去年のようなことはできないだろう——と、私自身の中に迷いがあった。しかし、板書をノートに写して、それを覚えて、試験でいい点を取る勉強しかできない生徒。何を考えるべきか、何をどう学ぶべきかを自分では考えようともしない生徒。一番最初のつまずきに気づくほど、私は最初に霧の向こうに見つけようとしていた自分の授業を見失うまいと思った。一斉授業の中で彼らの意識や意欲を引き出せればいいのだが、それだけの力がまだ私にないとしたら、たとえ奇策であっても、私が考え得るかぎりの方法で試みるしかない。今年、二年め、少しは彼らの意識を揺り起こすことができるか、どうか。

（長崎県立川棚高等学校教諭）